

(銀のエンジェル賞 中学生の部)

非常口子の物語

中一・山内 菜月

私の名前は非常ひじょうぐちこ口子。変な名前でしょ。けどみんな絶対、私を見たことあると思うよ！ ほらほらあの非常口にいる白い人。走ってる感じのポーズの。それが私。だからこんな名前なの。友達もたくさんいて楽しい生活よ！ でも私はずっとこの役割がいやだった。例えば横断歩道の進む君と止まるちゃんは毎日とても活動的に働いているし、なくてはならないでしょ。でも私なんか毎日、毎日火事がおきているわけでもないし、何もしない日がほとんど。だから、「もうこんなのやめちゃえ！」
ってなって初めて外の世界に出た。

私をはじめいたところはなんか大きな建物がたくさんあって、とにかく人間がたくさんいる所だった。そして大きな看板に

「東京へようこそ」
と書かれている。

「東京に来ちゃった……」

思い切って外の世界に行ったものの何も分からない。どうしていかも分からないし、さらに私ってすごく小さいのよ。非常口の人って小さいでしょ。だからとにかくはしっこの方でひたすら歩いた！ 歩いてたら何かあるかもしれないと思って。そして何回も何回も人にふまれそうになりながらたどり着いた先はバス停だった。「もうどこでもいいからこの息苦しい場所から離れたい」

そう思いバスに乗った。

何時間くらい乗ったのだろう。ねむたくてうっかり寝てしまった私が目を覚ますとまず見えたのが山！ 次は田！ そして川が見えた。バスからおりると、とてもおいしい空気。

「東京とは全くちがう所に来たー！ 最高ー」私の気分は最高に上がっていた。本当に気持ちいい所だった。ここどこだろうと思っただけど、もうどうでもいいや。(笑)

でもここに来たものの次どうする？ またわけも分からず歩いていると何ものかに後ろから思い切りつままれた。そしてなんと宙にういている！

「うあーやばい、やばい！」

もうパニック状態。そして少しおちついてから上を見ると何に何をされているかが分かった。とんびに山の方へ運ばれてた！ 再びパニックになりもうそこから記憶がなくなった……。

そして何かにつつかれている感じがして目を開けると小鳥が大きく口を開けて私を食べようとしていた。私は急いで小鳥の口ばしをキックしなんとか食べられずにすんだ。

(なかなか私もやるときはやる女じゃない)と浮かれていたのもつかの間、私はまた宙に浮いていた。しかも鳥じゃなくてどんどん地面に近づいていく。さっきいた小鳥の巣からおちてしまったのだ。

(もう終わった……。みんな今までありがとう)そんなことを思っていたら地面にはおちずだれかの手の中にいた。温かくて優しい手だった。顔を見てみると優しい目で、しわくちやのおばあちゃんだった。

「助けてくれてありがとう」

私は感謝の気持ちでいっぱいだった。おばあちゃんは、

「いいよ、いいよ」

と笑顔いっぱい顔で答えてくれた。

そして私はおばあちゃんの家に行った。とても大きな家で、木でできていてとてもおちつく家だった。私は普段ビルの中にいるからこんな初めてですごかった。そしておばあちゃんは汚れていた私をきれいにしてくれてごはんも作ってくれました。それがとってもおいしいこと！

私はそれからおばあちゃんと過ごした。畑仕事を手伝った。私はあせビツシヨリになりながら手伝った。体の小さな私はミニトマトを2つずつ運ぶお手伝いをした。

「体が小さいのによくがんばるねえ」

おばあちゃんにそう言ってもらえるのもすごくうれしかった。私はおばあちゃんと過ごすのがものすごく楽しかった。

いつも元気なおばあちゃんが畑仕事の中、急に倒れてしまった！ 私は急いで病院に電話をして救急車で運んでもらった。電話をするのに20分くらいかかったんだけどね！

そして私はおばあちゃんの様子を見に行きました。思った以上におばあちゃんは元気そうで安心！ もう明日には退院できそう。

そんなとき、とつぜん大きなサイレンが病院中にひびきわたった。そしてアナウンスが流れて

「ただ今、1階で火事が発生しております。病院のはしにある非常口から避難してください」

「おばあちゃん早く逃げよう」

おばあちゃんはすっかり元気になっていたので非常口に向かって行きました。

でもけむりがものすごくで非常口がなかなか見つけられなかった。

するとなにか緑の光と白いのが動いているのが見えた。そして「こつちが非常口だよ。みんな早く避難して！ ほら早く！」と声がした。それは非常口にいるあの白い人が必死で呼びかけていた。

私はそれがすごくかっこよく見えた。普段、あまり活動しないからこそ、いざというときに1人でも多くの命を助けようと呼びこんでいる同じ非常口の仲間としてすごくかっこよかった。

そして火事もおさまって私はおばあちゃんに、

「私、非常口にもどろうと思う！ 今までありがとう」

「いいえ、また遊びにおいで。自分の仕事にほこりを持って！」

そして私はもといたビルの非常口にもどりました。

今私はこの役割が大好き。だってみんなの命に関わるし、一番なくってはならないのかもしれないよ！

でもまず火事がないのが一番だけどね！
